

病理解剖数の減少をどうするか

—特にアンケート結果にみる臨床医側と病理医側双方の意見を参考に—

立山 義朗[†] 中園 裕一^{*} 寺本 典弘^{**}第77回国立病院総合医学会
2023年10月20日 於 広島

IRYO Vol. 79 No. 2 (104-111) 2025

要旨

病理解剖は、医療の検証機能という重要な役割があるにもかかわらず、ここ40年間病理解剖数は減少の一途をたどっている。解剖数の減少の原因を探り、その対処法のヒントを得る目的で、臨床医と病理医それぞれを対象にアンケート調査を行った。対象は、140のNHO病院の臨床医と病理医が中心で、病理医は若干名の追加アンケートを別途行った。主なアンケート項目は、対象者の病院規模などの背景に加え、解剖やCPC（Clinical pathological conference：臨床病理検討会）への興味や意欲、解剖数減少の原因、Ai（Autopsy imaging：死亡時画像診断）の利用、解剖やAiの経費についてなどである。臨床医は256人（病院管理者36人、部署責任者109人、部署所属医師69人、研修医・専攻医42人）、病理医は40人（部署責任者27人、部署所属医師13人）と追加の病理医8人（部署責任者7人、部署所属医師1人）であった。病院は400床以上の比較的大きな教育研修病院が多く、病院管理者や部署責任者がやや多かった。臨床医の解剖への興味は75%と高かったが、職位の高い医師ほど興味のある医師の割合が高く、病理医の解剖への意欲も部署責任者で興味のある医師の割合が高かった。CPCについてはその参加の意義は理解できる一方で、CPCへの意欲は臨床医、病理医ともにやや低かった。解剖数減少の原因については、臨床医、病理医ともに多忙で余裕のなさが目立ったが、臨床医による遺族からの許諾が得られにくくなったことや他科や緩和病棟転科や自宅での看取りの増加なども挙がっていた。Aiについては、解剖が第一は共通認識であるが、解剖にAiの活用が提案されていた。解剖とAiの公的財政措置も臨床医と病理医の共通認識であった。以上より、本来の解剖の意義を再認識し、一定数の解剖数を保つことで、病理側の解剖技術の伝承を可能とし、いざという時、解剖可能な体制を構築しておくことが求められるが、人員の増加やタスクシェアやタスクシフト、解剖とAiの中央化など標準的な解剖システム構築などを提案したい。

キーワード 病理解剖, Ai, アンケート, 公的財政措置, タスクシェア

国立病院機構広島西医療センター 臨床検査科（現病理診断科） *国立病院機構別府医療センター 病理診断科

**国立病院機構四国がんセンター 病理科 †医師

著者連絡先：立山義朗 国立病院機構広島西医療センター 臨床検査科（現病理診断科）

〒739-0696 広島県大竹市玖波4-1-1

e-mail：tachiyama.yoshiro.cn@mail.hosp.go.jp

(2024年8月14日受付 2024年10月25日受理)

What to Do about the Decline in the Number of Pathological Autopsies : Especially with Reference to the Opinions of Both Clinicians and Pathologists by the Questionnaire Survey Results

Yoshiro Tachiyama, Yuichi Nakazono* and Norihiro Teramoto**

NHO Hiroshimanishi Medical Center *NHO Beppu Medical Center **NHO Shikoku Cancer Center

(Received Aug. 14, 2024, Accepted Oct. 25, 2024)

Key Words : autopsy, Ai, questionnaire survey, public financial resources, task share